

毎日歌壇

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

米川千嘉子 選

まっしろな手帳が海のようにだからその海に行
くバスを夢みる 名古屋市 森本 有
△評▽手帳が光り輝く海に見えたのだ。想
念が自由に広がる。比喩だった海に行きた
くなる。バスに旅の思いがあふれている。

すいこまれそうな曇天わたしたち二人の庭の
まぶしい金柑 津市 川原田明子
△評▽明るい曇天なのだろう。すいこまれ
る感覚がいい。キンカンの色が鮮やかだ。

ベランダに長袖シャツが干してある今日の風
向き南南西 沼津市 麻場 育子
笑うしかないときもある笑えたらいいときも
あるつづく生活 飯塚市 白木 小鳩
標本と過す一日魂を集める部屋にかりそめ
の雪 川崎市 新井 将

この生は未来へ続く一瞬の風だとしても嬉し
い限り 北九州市 もりともみち
『仲直り』方法 犬と 検索の前にボールが
転がってくる 大津市 世田 夏雪

フアンラド製の傘をメルカリで買ったのフアンラ
ンド土産と書いてあってき 直方市 大石 聡美
ストローをグラスにさせば鳴る水これは真冬
の星の瞬き 平塚市 芝澤 樹

風葬のふりでも世界に身を晒す薄荷ドロップの
ような月だな 熊本 飾 磨屋

セイレーンの率いる船に海という巨大な過去
は裂かれつつける 加古川市 石村 まい
△評▽「老いたる海よ」と呼びかけたロー
トレアモンを思い出す。裂かれても海はそ
のまま生きつつける。

三畳間に寝息も爪も蠢いて火星や月は硬く
て冷たい 堺市 江口 智幸
△評▽そこに火星や月が寝ているのだから
か。だから硬さや冷たさがわかるのか。

つまさきの最後の鱗を剥がしつつ孤独のか
くも鮮やかな夜 東京 境 千尋
幾重にも折り重なりし夜の帳剥ぎ取りゆけば
ランプの灯り 甲府市 村田 一広

大空に枯れ葉の群れが飛んでいく嫉妬を招き
入れるみたいだに 岡山市 松井 度
一曲に一度だけ鳴らすシンバルの奏者の沈黙
高舌蘭 福岡市 水川 海

ライターの火をもらふときお互ひのしづかさ
を聴く 短きえいゑん 川崎市 何村 俊秋
脱線してもなお走る真王星は勝手に我を励ま
している 東京 カ ヒ

べらついた椅子に背筋を立てながら塩化銅な
る書を混ぜる 所沢市 里見 脩一
もつ二度と砂のかたちは戻らない波のすべて
を抱き留めたなら 横浜市 安西 大樹

ママと言ふ間のだんだんとせばまりぬゆふ
れの子の声のかなしさ 名張市 山縣みさを
△評▽声だけを聞いている場面か。ママを
呼ぶ子の声の「間のだんだんとせばまり」の
確かな表現に作者の案じる心が出てくる。

嫌なこと思い出すのは思い出す余裕があるの
かもしれなくて 奈良市 久保 祐子
△評▽心の観察が深い。「嫌なこと」をな
ぜ思い出したのかを考えている。

認知されたくないタイプのファンだから顔を合わ
せて好きといえない 相模原市 榎本 ハナ
ふたりして駅までの道サザンカに触れないよ
うに縦に並んで 川崎市 栢田 宏明

道幅は江戸も令和も変わりなく旧街道のざわ
めく光 東京 夏目 そよ
開店を待ち焼きたてのワッフルを食むふわふ
わの旅のスタート 瑞穂市 渡部 芳郎

丁寧に注文手順話されて知っていますと言ひ
そびれてる 駒ヶ根市 市山 利也
そうだねと言えは和らぐあなたには流れて止
まぬ川があるらし 仙台市 小野寺寿子

母親の少女時代を見守りし製紙工場眠りにつ
けり 札幌市 住吉和歌子
ゴミ箱も時刻表さえもはざされて苦情言つべ
き駅員も消ゆ 堺市 門哉 慧遠

「休みなさい」大の里へと妻叫ぶ過労の私へ
叫んだように 春日市 伊藤 亮
△評▽ケガがあっても責任感ゆえ頑張っ
てしまふ。頑張りすぎる怖さを夫のことで痛
感した妻。「叫ぶ」が強く響いてくる。

銀ブラというものありし 青春の銀ブラせざ
りし日々を重なる 垂水市 岩元 秀人
△評▽流行の銀ブラに憧れていたのだが、
実現することなかった。切ない記憶。

ござ敷いていちようの黄葉を数えてた買物
ごっこ幼きふたり 千葉市 中村キヨ子
初恋の人が夫になったので女子会とかは静か
にしている 千葉市 与 葉

ホスピスの北に小さき社あり母の余命を託
して去りぬ 前橋市 横田八重子
絵馬読めば込められし願ひ慎ましく人は美し
人は愛おし 大阪市 鈴木 雅子

パソコンのごとは教えてくれるから「ダメな
子だ」ではなくなる息子 仙台市 石川 初子
ストローで吸い込まれるようスボスボと犬が
飛び込む庭先の雪 松戸市 渡邊 理紗

目刺し焼き側でべうーと腹の鳴る音は知らぬ
うち来た猫のもの 下関市 富本 均
花の名を持つは稀なる男らの集ひし楽楽の梅
の園はや 名古屋市 浅井 克宏

投稿規定

2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、宛先は「毎日歌壇」。

は「毎日歌壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や、同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開し、本社が作成または許諾した出版物やメディアに掲載する可能性があります。